冨田恭彦教授　略歴

生年月日
昭和27年（1952年）2月15日

履歴

【学歴】

昭和45年3月31日　香川県立丸亀高等学校卒業
昭和45年4月1日　京都大学文学部入学
昭和50年3月31日　京都大学文学部哲学科（哲学）卒業
昭和50年4月1日　京都大学文学部哲学科（哲学）聴講生（昭和51年3月31日まで）
昭和51年4月1日　京都大学大学院文学研究科修士課程（哲学）入学
昭和53年3月31日　京都大学大学院文学研究科修士課程修了
昭和53年4月1日　京都大学大学院文学研究科博士後期課程（哲学）進学
昭和56年3月31日　京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学

【学位】

平成7年3月23日　博士（文学）京都大学

【職歴】

昭和56年4月1日　学術振興会奨励研究員（昭和56年9月30日まで）
昭和56年10月1日　京都教育大学講師（教育学部）
昭和59年4月1日　京都教育大学助教授（教育学部）
昭和62年4月1日　京都大学助教授（教養部）
平成3年4月1日　京都大学大学院（人間・環境学研究科）兼任
平成3年8月　ハーバード大学ハーバード・イェンチン研究所客員研究員（平成4年7月まで）
平成4年10月1日　京都大学助教授（総合人間学部）
平成11年4月1日　京都大学教授（総合人間学部）
平成15年4月1日　京都大学教授（大学院人間・環境学研究科）
平成22年4月1日　京都大学大学院人間・環境学研究科長／総合人間学部長（平成26年3月31日まで）
平成29年3月31日　定年により退職

主要な役職

【部局】
人間・環境学研究科長
総合人間学部長
人間・環境学研究科副研究科長
など
【全学】
京都大学評議員
京都大学経営協議会委員
京都大学財務委員会委員
京都大学企画委員会委員
京都大学研究組織改革専門委員会（第1部会）副委員長
など

所属学会

関西哲学会（委員）
日本現象学会
日本哲学会（編集委員）
日本科学哲学会（編集委員）
British Society for the History of Philosophy　各会員

冨田恭彦教授　業績一覧

I　著書（単著）

1 冨田恭彦『ロック哲学の隠された論理』（勁草書房、一九九一年）
2 冨田恭彦『クワインと現代アメリカ哲学』（世界思想社、一九九四年）
3 Yasuhiko Tomida, *Idea and Thing: The Deep Structure of Locke's Theory of Knowledge*, in *Analecta Husserliana*, XLVI (Dordrecht, Boston, and London: Kluwer), pp. 3–143.
4 冨田恭彦『アメリカ言語哲学の視点』（世界思想社、一九九六年）
5 冨田恭彦『科学哲学者柏木達彦の多忙な夏――科学ってホントはすっごくソフトなんだ、の巻』（ナカニシヤ出版、一九九七年）
6 冨田恭彦『科学哲学者柏木達彦の冬学期――原子論と認識論と言語論的転回の不思議な関係、の巻』（ナカニシヤ出版、一九九七年）
7 冨田恭彦『科学哲学者柏木達彦の秋物語――事実・対象・言語をめぐる四つの話、の巻』（ナカニシヤ出版、一九九八年）
8 冨田恭彦『哲学の最前線――ハーバードより愛をこめて』（講談社現代新書、一九九八年）
9 冨田恭彦『科学哲学者柏木達彦の春麗ら――心の哲学、

言語哲学、そして、生きるということ、の巻』（ナカニシヤ出版、二〇〇〇年）
10 Yasuhiko Tomida, *Inquiries into Locke's Theory of Ideas* (Hildesheim, Zürich, and New York: Georg Olms, 2001).
11 冨田恭彦『科学哲学者柏木達彦の番外編――翔と詩織、あるいは、自然主義と基礎づけ主義をめぐって、の巻』（ナカニシヤ出版、二〇〇二年）
12 冨田恭彦『観念論ってなに？――オックスフォードより愛をこめて』（講談社現代新書、二〇〇四年）
13 冨田恭彦『対話・心の哲学――京都より愛をこめて』（講談社現代新書、二〇〇五年）
14 冨田恭彦『観念説の謎解き――ロックとバークリをめぐる誤読の論理』（世界思想社、二〇〇六年）
15 冨田恭彦『アメリカ言語哲学入門』（ちくま学芸文庫、二〇〇七年、著書［単著］4『アメリカ言語哲学の視点』の改訂増補文庫版）
16 Yasuhiko Tomida, *The Lost Paradigm of the Theory of Ideas: Essays and Discussions with John W. Yolton* (Hildesheim, Zürich, and New York: Georg Olms, 2007).
17 Yasuhiko Tomida, *Quine, Rorty, Locke: Essays and Discussions on Naturalism* (Hildesheim, Zürich, and New York: Georg Olms, 2007).
18 冨田恭彦『科学哲学者柏木達彦の多忙な夏――科学がわかる哲学入門』（角川ソフィア文庫、二〇〇九年、著書［単著］5『科学哲学者柏木達彦の多忙な夏――科学ってホントはすっごくソフトなんだ、の巻』の改訂増補文庫版）
19 冨田恭彦『科学哲学者柏木達彦のプラトン講義』（角川ソフィア文庫、二〇〇九年、著書［単著］7『科学哲学者柏木達彦の秋物語――事実・対象・言語をめぐる四つの話、の巻』の改訂増補文庫版）
20 冨田恭彦『科学哲学者柏木達彦の哲学革命講義』（角川ソフィア文庫、二〇一〇年、著書［単著］6『科学哲学者柏木達彦の冬学期――原子論と認識論と言語論的転回の不思議な関係、の巻』の改訂増補文庫版）
21 Yasuhiko Tomida, *Locke, Berkeley, Kant: From a Naturalistic Point of View* (Hildesheim, Zürich, and New York: Georg Olms, 2012; 2nd edn., revised and enlarged, 2015).
22 冨田恭彦『観念論の教室』（ちくま新書、二〇一五年）
23 冨田恭彦『ローティ――連帯と自己超克の思想』（筑摩選書、二〇一六年）
24 冨田恭彦『カント哲学の奇妙な歪み――『純粋理性批判』を読む』（岩波現代全書、二〇一七年）
25 冨田恭彦『カント入門講義――超越論的観念論のロジック』（ちくま学芸文庫、二〇一七年）

Ⅱ　著書（共著）

1 大森荘蔵・滝浦静雄・中村雄二郎・藤沢令夫・市川浩・加藤尚武・木田元・坂部恵・坂本賢三・竹市明弘・村上陽一郎編『新岩波講座哲学 第6巻 物質 生命 人間』（岩波書店、一九八六年、［担当箇所］Ⅲ 物質系としての生

命2「因果律と目的論」一三一～一五一頁）

2 丸山高司・小川侃・野家啓一編『知の理論の現在』（世界思想社、一九八七年、［担当箇所］Ⅱ 知の地平2「言語――概念図式の問題をめぐって」八一～九四頁）

3 竹市明弘・常俊宗三郎編『哲学とはなにか――その歴史と可能性』（勁草書房、一九八八年、［担当箇所］Ⅲ 現代哲学の方法と立場 七「分析哲学」一六一～一七二頁）

4 新田義弘、丸山圭三郎・子安宣邦・三島憲一・丸山高司・佐々木力・村田純一・野家啓一編『岩波講座現代思想 第4巻 言語論的転回』（岩波書店、一九九三年、［担当箇所］二 言語論的哲学の展開 7「言語行為論とプラグマティクス」一八三～二〇八頁）

5 牧野英二・中島義道・大橋容一郎編『カント――現代思想としての批判哲学』（情況出版、一九九四年、［担当箇所］3 現代哲学とカント「ローティとカント」一四三～一五一頁）

6 宗像恵・中岡成文編『西洋哲学史〔近代編〕――科学の形成と近代思想の展開』（ミネルヴァ書房、一九九五年、［担当箇所］第4章 形而上学解体の動き（1）1「ロック」八九～九四頁）

7 竹市明弘・金田晉編『久野昭教授還暦記念 哲学論文集』（以文社、一九九五年、［担当箇所］「観念形成における自由と創造性――ロックの観念説再解釈に向けての一つの試み」四七～六八頁）

8 四日谷敬子・内藤道雄編『形象と言語――その哲学的背景と課題』（世界思想社、一九九七年、［担当箇所］Ⅰ 言語 1「言語論的転回再考――祭りのあとで」一八～五二頁）

9 Arno Baruzzi and Akihoro Takeichi (eds.), *Ethos des Interkulturellen: Was ist das, woran wir uns jetzt und in Zukunft halten können?* (Würzburg: Ergon, 1998), pp. 30–39: 'Anti-Relativismus und menschliche Kreativität bei Donald Davidson'.

10 Tadashi Ogawa, Michael Lazarin, and Guido Rappe (eds.), *Interkulturelle Philosophie und Phänomenologie in Japan: Beiträge zum Gespräch über Grenzen hinweg* (München: Iudicium, 1998), pp. 105–111: 'Yolton on Cartesian Images'.

11 野家啓一・村田純一・伊藤邦武・中岡成文・内山勝利・清水哲郎・川本隆史・井上達夫編『岩波新・哲学講義3 知のパラドックス』（岩波書店、一九九八年、［担当箇所］Ⅱ セミナー2「言語論的転回と近代観念説」九九～一二四頁）

12 有福孝岳編『認識と情報――リレー講義録 総合人間学を求めて①』（京都大学学術出版会、一九九九年、［担当箇所］［第7講］「観察と理解――科学哲学からのアプローチ」一七九～一九七頁）

13 竹市明弘・渡辺雄三・早川勇編『心とコミュニケーション――精神環境の探求』（勁草書房、一九九九年、［担当箇所］Ⅱ 精神環境の基礎知識と考え方《言語コミュニケーション》一 言語コミュニケーションの基礎 c「翻

14 訳と異文化理解——異文化理解の基礎となる好意の原理」一五九～一六六頁）

15 Stephen Gaukroger, John Schuster, and John Sutton (eds.), *Descartes' Natural Philosophy* (London: Routledge, 2000), pp. 569–575: 'Descartes, Locke, and "Direct Realism"'.

16 石黒武彦編『科学と人文系文化のクロスロード』（萌書房、二〇〇八年、［担当箇所］第3章「全体論・語彙・創造性——科学／そのしなやかなるがゆえに強靱な」四三～六七頁）

17 Sarah Hutton and Paul Schuurman (eds.), *Studies on Locke: Sources, Contemporaries, and Legacy* (Dordrecht: Springer, 2008), pp. 261–275: 'Locke's "Things Themselves" and Kant's "Things in Themselves": The Naturalistic Basis of Transcendental Idealism'.

18 飯田隆・伊藤邦武・井上達夫・川本隆史・熊野純彦・篠原資明・清水哲郎・末木文美士・中岡成文・中畑正志・野家啓一・村田純一編『岩波講座哲学 第14巻 哲学史の哲学』（岩波書店、二〇〇九年、［担当箇所］Ⅱ 哲学史を読み直す 2「認識論史の終焉」一七一～一九五頁）

19 S.-J. Savonius-Wroth, Paul Schuurman, and Jonathan Walmsley (eds.), *The Continuum Companion to Locke* (London and New York: Continuum, 2010), pp. 191–193: 'Number and Infinity'.

Randall E. Auxier and Lewis Edwin Hahn (eds.), *The Philosophy of Richard Rorty* (Chicago and La Salle: Open Court, 2010), pp. 293–309: 'Davidson-Rorty Anti-representationalism and the Logic of the Modern Theory of Ideas'.

Ⅲ 論文（単著）

1 冨田恭彦「知覚表象説と分節音——ロックの言語説の諸問題から」『叡山學院研究紀要』第二号、一九七九年、八七～九八頁

2 冨田恭彦「「対象」の問題——フレーゲの見解をめぐって」『哲学論叢』（京都大学哲学論叢刊行会編）、第7号、一九八〇年、三三～四一頁

3 冨田恭彦「フッサール研究（1）学問・学問論・純粋論理学」『叡山學院研究紀要』第3号、一九八〇年、六六～七五頁

4 冨田恭彦「ロックの単純観念のある統一的性格」『哲學』（日本哲学会編）第三一号、一九八一年、一三五～一四三頁

5 冨田恭彦「サール哲学のその後——精神哲学による言語哲学の基礎づけ」『理想』第五九〇号、一九八二年、四九～六五頁

6 冨田恭彦「単純観念と抽象——ロックの「観念の道」の一問題」『京都教育大学紀要』Ser. A, No. 63 一九八三年、五九～七〇頁

7 冨田恭彦「リチャード・ローティ『哲学と自然の鏡』」『現代思想』第一四巻第四号、一九八六年、一三八～一四三

頁
8 冨田恭彦「基礎づけか連帯か——アーペルに対するローティ擁護の試み」『思想』第七四三号、一九八六年、二九～四四頁
9 冨田恭彦「直観・語彙・自己形成——西洋の「対話」のローティ思想における一つの帰結」『理想』第六三四号、一九八七年、三五～四四頁
10 冨田恭彦「ロックにおける経験的対象と物自体——「知覚のヴェール説」的ロック解釈に対する批判の試み」『思想』第七八七号、一九九〇年、一〇一～一一六頁
11 冨田恭彦「自然種名と二種類の本質——ロックと「新しい指示理論」」『人文』（京都大学教養部編）第三六集、一九九〇年、一～二七頁
12 冨田恭彦「整合主義的創造活動としての哲学——分析哲学の将来に寄せて」『科学哲学』（日本科学哲学会編）第二三号、一九九〇年、一～九頁
13 冨田恭彦「反相対主義の一つのかたち——デイヴィドソンの解釈説が示唆するもの」『倫理学研究』（関西倫理学会編）第二一集、一九九一年、七四～八四頁
14 Yasuhiko Tomida, 'A Phenomenological Interpretation of John Locke's Distinction between Sensible and Intelligible Ideas', *Phenomenological Inquiry*, 16 (1992), pp. 5–27.
15 冨田恭彦「分析性・規約・全体論——最近の資料に見るクワインとカルナップの初期の関係」『人文』（京都大学教養部編）第三九集、一九九三年、一～一六頁
16 冨田恭彦「反表象主義と自己形成——分析哲学の伝統が示唆するもの」『理想』第六五一号、一九九三年、四八～五七頁
17 冨田恭彦「根本的翻訳と根本的解釈——解釈学のもう一つの系譜から」『現象学年報』（日本現象学会編）第九号、一九九三年、六五～七九頁
18 冨田恭彦「経験論の再検討——その自然主義的枠組みをめぐって」『アルケー』（関西哲学会編）第二号、一九九四年、一三七～一四五頁
19 冨田恭彦「千角形と千面体——ロック解釈の練習問題」『京都大学総合人間学部紀要』第一巻、一九九四年、一～一一頁
20 冨田恭彦「超越論哲学と分析哲学——デイヴィドソン的反表象主義と近代観念説の論理」『哲學』（日本哲学会編）第四五号、一九九五年、四七～五九頁
21 冨田恭彦「「観念」の論理再考——デカルトにおける形而上学と自然学との間」『人間存在論』第一号、一九九五年、一一一～一二一頁
22 冨田恭彦「心像論的ロック解釈再考——エアーズに答えて」『京都大学総合人間学部紀要』第二巻、一九九五年、三三～四四頁
23 冨田恭彦「言語論的観念論と近代認識論——ローティ・クワイン・エアーズ・ウィルソン・ロック」『人間存在論』第二号、一九九六年、八一～九〇頁
24 Yasuhiko Tomida, 'The Imagist Interpretation of Locke

Revisited: A Reply to Ayers', *Locke Newsletter*, 27 (1996), pp. 13–30.

25 冨田恭彦「イギリス経験論と現代アメリカ哲学」『真宗総合研究所研究紀要』第一四号、一九九七年、五七～六八頁

26 Yasuhiko Tomida, 'Quinean Naturalism and Modern History of Philosophy', *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, 9, no. 3 (1998), pp. 27–34.

27 冨田恭彦「ロックの「観念」の論理空間・再考」『思想』第九一〇号、二〇〇〇年、六三～八四頁

28 冨田恭彦「心像論的ロック解釈の再検討」『思想』第九二〇号、二〇〇一年、七八～九八頁

29 冨田恭彦「バークリの観念説の矛盾」『アルケー』（関西哲学会編）第九号、二〇〇一年、一五～二五頁

30 冨田恭彦「バークリ再考――ロックとの比較」『思想』第九二九号、二〇〇一年、九九～一一六頁

31 冨田恭彦「バークリ再考（Ⅱ）――物質否定論の諸前提」『思想』第九三六号、二〇〇二年、四一～六三頁

32 Yasuhiko Tomida, 'Locke, Berkeley, and the Logic of Idealism', *Locke Studies*, 2 (2002), pp. 225–238.

33 Yasuhiko Tomida, 'Locke, Berkeley, and the Logic of Idealism II', *Locke Studies*, 3 (2003), pp. 63–91.

34 冨田恭彦「クワイン先生を回顧して――遅ればせの追悼文」『理戦』第七五号、二〇〇三年、六六～八三頁

35 Yasuhiko Tomida, 'Sensation and Conceptual Grasp in Locke', *Locke Studies*, 4 (2004), pp. 59–87.

36 Yasuhiko Tomida, '"Separation" of Ideas Reconsidered: A Response to Jonathan Walmsley', *Locke Studies*, 5 (2005), pp. 39–56.

37 Yasuhiko Tomida, 'Locke's Representationalism without Veil', *British Journal for the History of Philosophy*, 13 (2005), pp. 675–696.

38 冨田恭彦「反本質主義・偶然性・社会正義――ローティの社会哲学再考」『同志社大学ヒューマン・セキュリティ研究センター年報』第三号、二〇〇六年、八五～九九頁

39 Yasuhiko Tomida, 'The Lockian Materialist Basis of Berkeley's Immaterialism', *Locke Studies*, 10 (2010), pp. 179–197.

40 Yasuhiko Tomida, 'Ideas without Causality: One More Locke in Berkeley', *Locke Studies*, 11 (2011), pp. 139–154.

41 Yasuhiko Tomida, 'Experiential Objects and Things Themselves: Locke's Naturalistic, Holistic Logic, Reconsidered', *Locke Studies*, 14 (2014), pp. 85–102.

42 冨田恭彦「古典的経験論と自然主義」『人間存在論』第二一号、二〇一五年、七五～八五頁

43 冨田恭彦「カントの超越論的観念論の歪んだ論理空間――『純粋理性批判』の自然主義的基盤・再考」『思想』第一一〇〇号、二〇一五年、六八～九三頁

44 冨田恭彦「カントの「一般観念」説と図式論」『思想』第一一〇八号、二〇一六年、一一七～一三九頁

45 冨田恭彦「ロックと言えばタブラ・ラサ考」『人間存在論』

第二二号、二〇一六年、四三～四七頁

Ⅳ　論文（共著）

1　Yoshiko Takenaka and Yasuhiko Tomida, 'Locke's Naturalism Reconsidered: From the Viewpoint of Contemporary Microphysics', in Yasuhiko Tomida (ed.), *Locke and Kant: A Report of the JSPS Scientific Research 2005–2008* (Kyoto: Kyoto University, 2009), pp. 25–35; Yasuhiko Tomida, *Locke, Berkeley, Kant: From a Naturalistic Point of View* (Hildesheim, Zürich, and New York: Georg Olms, 2012; 2nd edn., revised and enlarged, 2015), pp. 199–209.

2　木村由佳／冨田恭彦「「わたし」論・試論――ブーバー的視点の、発達心理学からの展開」『ヒューマンセキュリティ・サイエンス』（ヒューマンセキュリティ・サイエンス学会編）第六号、二〇一一年、二七～四三頁

Ⅴ　その他

【対談】

1　W. V. クワイン／冨田恭彦「ある経験論的自然主義者の軌跡――クワインとの対話」『思想』第八二五号、一九九三年、四～三〇頁

【翻訳】

1　ユルゲン・ミッテルシュトラース「哲学か科学論か」『思想』第六六七号、一九八〇年、二四四～二六二頁（単訳）

2　ハインリッヒ・ロムバッハ「哲学の現在」竹市明弘編『哲学の変貌――現代ドイツ哲学』岩波書店、一九八四年、一三三～一六二頁（共訳）

3　リチャード・ローティ「認識論的行動主義と分析哲学の脱超越論化」竹市明弘編『分析哲学の根本問題』晃洋書房、一九八五年、三六〇～四〇一頁（共訳）

4　リチャード・ローティ「ポストモダンについて――ハーバーマスとリオタール」『思想』第七四四号、一九八六年、一二六～一四三頁（単訳）

5　リチャード・ローティ『連帯と自由の哲学――二元論の幻想を超えて』岩波書店、一九八八年（単訳）

6　ミーラ・ヴィスワナサン「『「いき」の構造』の構造」『理想』第六四三号、一九八九年、一二二～一二七頁（単訳）

7　リューディガー・ブープナー「カント・超越論的論証・演繹の問題」竹市明弘編『超越論哲学と分析哲学――ドイツ哲学と英米哲学の対決と対話』産業図書、一九九二年、三～二一頁（共訳）

8　リチャード・ローティ「超越論的論証・自己関係・プラグマティズム」竹市明弘編『超越論哲学と分析哲学――ドイツ哲学と英米哲学の対決と対話』産業図書、一九九二年、二三～六七頁（共訳）

9　ディーター・ヘンリッヒ「挑戦者か競争者か――超越論的戦略に関するローティの報告について」竹市明弘編『超越論哲学と分析哲学――ドイツ哲学と英米哲学の対決と対話』産業図書、一九九二年、六九～八〇頁（共訳）

10　W. V. クワイン「二つのドグマ」を回顧して」『思想』

第八六一号、一九九六年、一二四～一三六頁（単訳）

11 W. V. クワイン「観察文をたたえて」『思想』第八六一号、一九九六年、一三七～一四七頁（単訳）

12 ジョン・R・サール『志向性――心の哲学』誠信書房、一九九七年（共訳）

13 リチャード・ローティ「予測不能のアメリカ帝国」『ラチオ』（講談社）第一号、二〇〇六年、一六二～一七七頁（単訳）

14 ノウアム・チョムスキー「単純な真理・難しい問題――テロと正義と自衛に関するいくつかの考え」『ラチオ』（講談社）第二号、二〇〇六年、八～四四頁（単訳）

15 リチャード・ローティ『文化政治としての哲学』岩波書店、二〇一一年（共訳）

16 リチャード・ローティ「科学としての哲学・メタファーとしての哲学・政治としての哲学」『思想』第一一〇六号、二〇一六年、五一～八一頁（単訳）

【事典項目執筆】

1 廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末木文美士編『岩波哲学・思想事典』岩波書店、一九九八年（「『人間知性論』」、「観念」、「クワイン」、「タブラ・ラサ」などの項目執筆とともに、「編集協力者」を務める）

2 大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編『現代社会学事典』弘文堂、二〇一二年（「ローティ」担当）